

ハンドボールにおける日本トップレベルのゴールキーパーの ディスタンスシュートに対するキーピング動作に関する研究

大山 翔伍 (202110074、ハンドボールコーチング論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：手の位置、スタンス、ゴールラインからの立ち位置、個性

【目的】

本研究では、日本のトップレベルのゴールキーパーを対象に、フリースローラインよりも後方から放たれるディスタンスシュートに対して、ポジショニングからセービングまでのキーピング動作の特徴を明らかにすることで、ゴールキーパーのトレーニングや指導に役立つ知見を得ること、今後の自身の競技力向上に繋げることを目的とした。

【方法】

対象は岡本大亮、中村匠、甲斐昭人、岩下祐太の4選手とした。

本研究では、日本ハンドボールリーグ 25 試合、187 シーンを分析した。ディスタンスシュートに対するゴールキーピング動作は、「ポジショニング局面」、「プレセービング局面」、「セービング局面」の3局面に分けた。

ポジショニング局面では、スタンス、手の位置、体勢、脚動作、ゴールラインからの立ち位置を分析した。プレセービング局面では、スタンス、手の位置、体勢、脚動作を、セービング局面では、動作方向、体勢、ゴールラインからの立ち位置、セービング動作上肢、セービング動作下肢、シュートコースなどを分析した。

4選手の特徴を比較するために、カイ二乗検定と残差分析を行った。

【結果と考察】

岡本は、ポジショニング局面では手は頭上でスタンスを中程度と広めにし、ゴールラインから 0.5 歩前に出て垂直の体勢で構えていた。また、シューターがテイクバックするまで脚動作を行いシュートに対して細かく準備しているという特徴があった。プレセービング局面では、手を顔の位置に下げ、スタンス幅を広めに構えるという特徴があった。セービング局面では、後傾姿勢になる傾向があり、シュートに対して脚と片手でセービング動作を行う傾向があるため、身体全体でセービングしていた。しかし、ボールと逆方向に動作した場合、セーブ成功の割合が 0% 近くになる傾向があった。

中村は、ポジショニング局面では手は顔の位置で広めのスタンスでゴールラインから 0.5 歩未満の位置で前傾の体勢で構えていた。プレセービング局面ではスタンス幅は変わらず、手を胸と腹の位置まで下げる特徴があった。セービング局面では立ち位置は変わらず、体勢は垂直になり、片手でセービング動作を行う特徴があった。

甲斐は、ポジショニング局面では手は腹の位置でさまざまなスタンス幅で構え、ゴールラインから 0.5 歩から 0.5 未満の位置で前傾に構え、脚動作を行わないという特徴があった。プレセービング局面では手を胸の位置に上げることもあり、スタンス幅を中程度から広めに構える特徴があった。セービング局面では垂直と後傾になることが多く、ゴールラインから 0.5 歩前でセービング動作を行う特徴があった。また、シュートに対して脚を使い片手でセービング動作を行う傾向があった。

岩下は、ポジショニング局面では手は頭上で広めのスタンスで構え、ゴールラインより 1 歩以上前に出て前傾で構える特徴があった。プレセービング局面では手は顔または肩の位置まで下がり、脚動作はせず垂直の体勢で構える特徴があった。セービング局面では、ボールと逆方向に動作した場合でも、セーブ成功の割合は下がらない傾向があった。セービング時にはゴールラインから 1 歩以上前で動作を行い、シュートコースは中央の上段のセーブ成功の割合が低い傾向があった。

【結論と実践への提言】

本研究では、ディスタンスシュートに対するキーピング動作では、ゴールキーパーの個性によってさまざまな方法が認められることが示された。一方、共通する方法として、プレセービング局面ではスタンス幅をポジショニング局面からあまり変えず、前傾または垂直体勢で構えること、セービング局面ではボール同方向に動き、前傾でシュートに対して両手と脚を使うことが重要であり、これらの方法の習得がディスタンスシュートに対するキーピングのトレーニングに求められると実践現場に提言できる。